

巻頭言

世代



総合科学部長  
佐藤 正樹

日本ではとくに昔話の蒐集で知られるグリム兄弟は、日本流にいうと年子で、生前も没後も、そして今もなお「兄弟」の名称を冠して語られることが多い。

弟ヴィルヘルムのせがれヘルマンは『グリム童話集』序に、「ドイツではグリム兄弟の名を知らぬ者はない。子どもたちはグリム兄弟への愛にはぐくまれて大きくなる。兄弟の親戚ですかと訊ねられることも幾たびかあったが、わたしはその息子であり甥であればこそ、質問者の親戚同然にもなったのである。わたしにとってこれにまさる誉れはあるまい。」と、誇らしげに綴っている。

先に亡くなったのは弟のほうであった。一八五九年十二月のことであるから、兄弟畢生の大作『ドイツ語辞典』第二巻の刊行を見ることはかなわなかった。ちなみに一八五二年に配本の始まったこの辞典は、歴代言語学者

の心血を注いだ努力のすえに、また、たび重なる戦火をくぐり抜けて、百二十三年後の一九六一年、ついに三十二巻の堂々たる業績となって結実した。

弟が死んだ翌一八六〇年七月五日、兄ヤーコプはベルリン科学アカデミーの講堂で『ヴィルヘルム・グリム追悼演説』を行った。薄暗い講堂の窓から光を採り入れるかのように原稿をそちらへ傾けながら、いつもの少しかすれた声で淡々と、しかし哀惜の情をこめて弟の思い出を語ったのであった。

このなかでヤーコプは、兄弟のともに過ごす時間の意味を説いている。兄弟姉妹はなにか不幸が生じないかぎり、その人生をほぼまると共有して生きる。「子どものころは一緒に遊び、おとなになつたら行動をともにし、ならんで食事をしながら、老年を迎える。」これが兄弟姉妹だ。これにたいして親子の間からではそうはいかない。「両親と子どもが生活をともにするのは、たかだか人生の半分にすぎない。」「息子は父の子ども時代も青春時代も知らない。父も息子が成人し、老人になるすがたをもう身をもつて体験することはない。」「親と子はつまり「完全な同時代人ではない。両親の命は子どものそれよりも早く過去のなかへ沈み、子の命はそのあとで、未来を目標して立っている。」

これはだれの目にも自明な、単純な真理だといえはいえるが、学生諸君が成長し、いつか老年を迎えたとき、わたしたちはそこに立ち会うことを許されないのだという厳然たる真実が、わたしは近年しきりに気にかかるの

である。諸君はわたしたちの子ども時代も青春時代も知らない。わたしたちに諸君の老年を知るすべはない。まったく異なる人生の線が、たまたま時間と空間をつかのま共有するにすぎないのである。

昔のひとはこれを、茶道の心構えになぞらえて一期一会といい、またとない出会いの重い意味を吟味した。

わたしたちは諸君に何を伝えられるだろう。何を伝えるべきであろう。総合科学部創立三十周年記念シンポジウムにお招きした小説家、瀬名秀明さんは、ある短編のなかで、それを「思い」という平易なことばで語った。「思いは残る」とも言っている。

わたしがこんなことをわざわざしたためるのは、わたし自身が老年にさしかかり、諸君に伝えるべき「思い」とはどのようなものか、しかも諸君の心に「残る」メッセージを伝えるかということに、自分でも不思議なほどこだわっているからだ。実はそういうものこそが「教育」の意味なのではないか。それが手近な目標にすげかえられ、教育というものが見くびられているのではないか。そんな危惧の念さえいだくのである。

かのグリムは『ドイツ語辞典』を書きはじめ、ついにFの途中でその先を他人にゆだねなければならなかった。わたしたちは諸君の将来に立ち会うことはできない。しかし、その未来に向けて語るからこそ一期一会の、いや、そもそも教育の本義ではないかと、わたしは希望と暗澹たる気分とを二つながらもちつつ沈思せざるをえない。